

## 追悼



### 故 田口 尚 先生 略歴

(昭和21年12月13日生～平成26年11月25日没)

#### <学歴・職歴>

昭和40年3月 長崎南高等学校卒業  
昭和46年3月 長崎大学医学部卒業  
昭和46年4月 長崎市立市民病院内科研修医  
昭和48年4月 長崎大学医学部附属病院検査部病理科医員  
昭和49年1月 長崎大学医学部附属病院検査部病理科助手  
昭和49年4月 福岡大学医学部第二病理学教室助手  
昭和52年7月 大分県立病院検査部病理科主任医師  
昭和53年4月 福岡大学医学部第二病理学教室助手  
昭和56年4月 福岡大学医学部第二病理学教室助教授  
昭和60年6月～昭和61年9月 西ドイツ, Münster 大学病理学教室に留学  
昭和61年10月～昭和62年3月 西ドイツ, Tübingen 大学病理学教室留学  
昭和62年4月 福岡大学医学部第二病理学教室助教授  
平成2年4月 長崎大学医学部第二病理学教室教授  
平成14年4月 長崎大学大学院医歯薬学総合研究科(医療科学専攻, 生命医科学講座)教授  
平成24年3月 長崎大学を定年退職  
平成24年4月 NPO 法人長崎腎と病理ネットワーク理事長

#### <学会活動>

日本腎臓学会理事 2004年4月～2010年3月  
日本腎臓学会功労会員 2012年4月～  
日本腎臓学会学術評議員 1983年4月～2012年3月  
日本腎臓学会法人評議員 1994年4月～2012年3月  
日本腎臓学会誌編集委員 2002年4月～2006年3月

日本腎臓学会査読委員 1994年4月～2002年3月  
腎病理標準化委員会委員長 2008年4月～2012年3月  
同 委員 2003年4月～2008年3月  
同 顧問 2012年4月～2014年3月  
腎臓病総合レジストリー小委員会 2008年4月～2012年3月  
日本腎臓学会企画委員 2006年4月～2009年3月  
日本腎臓学会学会あり方委員会 2008年4月～2009年3月  
腎臓学会用語集改訂委員会委員長 2005年4月～2008年3月  
ICD11専門委員 2009年4月～2012年3月  
ISN・ループス腎炎WHO分類改訂委員会 2002年4月～2006年3月  
日本医学会用語委員 2006年4月～2012年3月

#### <所属学会>

日本病理学会(評議員)  
日本腎臓学会(評議員, 理事, 2006～2009年)  
日本臨床分子形態学会(旧日本臨床電顕学会)  
日本組織細胞学会  
日本腎病理協会(世話人・顧問, 2008年4月～2010年3月: 世話人代表)  
American Society of Nephrology  
International Society of Nephrology

#### <学会運営>

日本腎臓学会西部部会会長(2005年9月)  
日本顕微鏡学会第36回電顕サマースクール(2010年7月)

## 田口 尚先生を偲んで

長崎腎病院院長  
原田孝司

晴天の霹靂とはこのようなことを言うのでしょうか。

日本の腎臓病理を代表する田口尚先生が急逝されました。ともにわが国の腎病理を担ってこられた先生方に衝撃が走ったこととお察しいたします。

田口先生と筆者は昭和46年に長崎大学と一緒に卒業し、田口先生は病理に、筆者は臨床へと進みました。その後、専攻は彼が腎臓病理を筆者は腎臓内科を選択し、以来43年間二人三脚で腎臓病の病理と臨床をやってまいりました。筆者にとって、彼の急逝は心の支えをなくしたに等しく、呆然と致しました。彼が病理を選んだ理由は長崎医学史に遡る必要があるようです。1857年当時、ポンペによって日本で最初の西洋医学伝習が開始されました。原病学として日本で最初の病理学が開講されています。ポンペ以降、幾多の病理学者に引き継がれてきたようです。そのなかには吉田腫瘍で有名な吉田富三教授も在職されています。そのような病理学の歴史に魅力を感じ、病理学を専攻したものと推察致します。

長崎大学では腎生検法が普及して間もない昭和43年から腎生検による診断と研究が始まりました。当時医学領域で電子顕微鏡研究のパイオニアの一人であった第二病理の竹林茂夫先生に腎グループの創設者の堀田 覚先生が腎生検の電顕診断をお願いし、それから臨床と病理の連携が始まりました。昭和49年に竹林茂夫先生が福岡大学医学部病理学教室教授に転出された折りに、田口先生は腎臓病学、血管病理学の教えを乞い同行いたしました。長崎大学の私たちは腎生検病理カンファランスに定期的に福岡大学まで出かけて、臨床所見と病理所見から最終診断をしていただいております。

その後、田口先生は昭和60年から西ドイツのMünster大学およびTübingen大学病理学教室に留学しております。筆者はロンドンのGuy's hospitalに留学していましたので、同時に病理と臨床で留学したことになります。福岡大学時代に電顕を検索した腎生検症例は1万例を超えていました。その後、平成2年に母校の第二病理学教室の教授として帰って来られ、私たち臨床家にとって非常に心強く大変喜んだものです。長崎に帰って来られてからも腎生検症例は1万例を超え、国内では質・量ともに有数の腎生検ファイルとなっています。近年では腎生検の診断は、光学顕微鏡、免疫組織化学でかなり情報が得られるようになってはいますが、電顕がないと確定診断ができない疾患が数多くあります。菲薄基底膜病や初期の糖尿病、遺伝性疾患であるAlport症候群、Fabry病、nail-patella症候群、LCAT欠損症、fibrillary glomerulonephritisやimmunotactoid glomerulopathyなどです。したがって、田口先生は常に電顕を用いた研究の必要性を説いておられました。

学会活動では、日本腎臓学会理事や腎病理標準化委員会の委員長を務められています。そのほか腎臓病総合レジストリー委員、ISN・ループス腎炎WHO分類改訂委員なども務めておられます。また、日本病理学会、日本腎臓学会、日本臨床分子形態学会、日本組織細胞学会などに所属し、日本腎病理協会では世話人代表もしておられます。特記すべきことは、日本腎臓学会、腎病理標準化委員会、日本腎病理協会編の腎病理アトラスの編集に携わり、日本の腎病理診断の標準化に貢献されたことです。最近では腎病理研究会の開催にかかわり、腎臓専門医のための腎病理夏の学校開催など、熱心に腎病理の教育にも力を注いでいらっしゃいました。

教室では豊富な腎生検材料を用いた研究を行い、併せて動物実験を加え多くの業績をあげておられます。現在ハーバード大学で研究員として活躍する人材(MS Razzaque)も輩出しています。

平成24年3月に長崎大学を定年退職されてからも、腎病理診断への思い・熱意は変わらず、NPO法人長崎腎と病理ネットワークを理事長として設立し、長崎のみならず九州内の他施設からの腎病理診断も引き受けられ、腎病理診断を継続しておられました。田口先生の亡き後も彼の遺志を汲んで筆者が理事長を引き継ぎ、病理診断を福岡大学腎病理の久野 敏先生にお願いして継続することになりました。先生も天国から見てくださり、そして喜んでくださっていると思っております。

それにしても田口先生のご逝去はあまりにも早すぎました。日本の腎病理学における大きな損失となりましたが、先生が育てた多くの腎病理にかかわる人材が遺志を引き継ぎ、さらに腎病理を発展させることを信じております。

長年にわたってご指導とご教授をいただいたことに御礼申し上げますとともに、ご冥福を心よりお祈り申し上げます。